

大学院初年次教育における リサーチリテラシーの涵養 ——国際文化研究科博士前期課程「国際文化研究基礎」 授業実践報告——

亀井伸孝・鈴木 隆・糸魚川美樹・本橋裕美・服部亜由未

はじめに：本論の目的・構成・共著者の役割

本論は、愛知県立大学大学院国際文化研究科博士前期課程必修科目「国際文化研究基礎」の3か年（2020～2022年度）の新しい試みを記録に残し、教育実践の達成と課題を分析、評価することで、今後の授業改善に資することを目的とする。

本論の共著者5人は、オムニバス形式で開講される同科目を担当した教員である。そのうち亀井は、同科目の全体コーディネータを3か年連続して担当した。5人とも、同科目の教育実践の経験に基づき、記録、分析、評価を行っている。

以下、1章では、同科目の全体的な概要を紹介する。2章では、同科目を構成する四つのパートのそれぞれについて、授業を担当した5人の教員が記録や分析を行う。最後に、全体を総括する。共著者の役割としては、2章の教育実践経験の記録は5人それぞれが執筆し、「はじめに」、1章、「おわりに」の草稿は全体コーディネータの亀井が作成した。最後に5人全員で全体を確認し、加筆を行った。

1章 「国際文化研究基礎」の概要

1-1. 新科目導入の経緯

かねてより、博士前期課程1年生に課せられた半期の必修科目として、「国際文化論」が開講されてきた。毎年度前期の昼と夜に1クラスずつ開講し、どちらでも受講できる形とすることで、社会人院生などにも配慮した形態をとつ

てきた。従来は1人の教員が両方とも担当する形を取っていたが、2017年度末の当該教員の定年退職をきっかけとして、同科目の担当体制と講義内容の検討が必要となった。2018～2019年度は、移行的措置として2人体制を採用したが、2020年度に現行の各クラス4人のオムニバス形式を導入、2021年度からは科目名称を「国際文化論」から「国際文化研究基礎」に変更して、現在に至っている（表1）。なお、本論では煩雑さを避けるために、名称変更前の2020年度の科目も含めて、「国際文化研究基礎」と総称している。

表1 「国際文化論」「国際文化研究基礎」の沿革（授業実施経験に基づき亀井作成）

年度	科目名称	担当体制	担当教員	事項
2017年度まで	「国際文化論」	1人体制	杉山三郎	杉山教員単独による講義。毎年度の前期に、昼クラスと夜クラスの両方を並行開講し、大学院生は自分の都合を念頭にどちらか一方を選択して履修する体制を取る（現在に至るまで踏襲されている形式）。
2018年度	「国際文化論」	2人体制	杉山三郎・亀井伸孝	杉山教員による講義に加え、亀井が参画して半分のコマ数を担当、研究倫理、学会発表、論文執筆などの指導を実施。研究科FD研究会で同年度の教育実践事例を発表。
2019年度	「国際文化論」	2人体制	杉山三郎・亀井伸孝	杉山教員による講義に加え、亀井が参画して半分のコマ数を担当、研究倫理、学会発表、論文執筆などの指導を実施。同年度末の杉山教員の離職に備えて、研究科企画委員会で次年度以降の新たな体制の計画を立案。昼夜共通のコーディネータを1人置くこと、半期を研究倫理、評価指導、論文執筆、学会発表の4パートに分割して4人で担当すること、昼と夜とで担当者を分けるためにそれぞれ3人ずつ、計6人の授業担当者を研究科内で選定することなどの方針を策定。新体制の準備、研究科FD研究会で新体制計画を発表。次年度の担当者選定を開始し、コーディネータ1人、昼クラス3人、夜クラス4人の担当者を確定した（2020年度のみ例外的に、夜クラスはコーディネータ以外に4人が参画した）。日本文化専攻では、日本文化学部2学科から1人ずつ、計2人の担当者を選定する方針を定めた。
2020年度	「国際文化論」	4人体制	亀井伸孝 ほか計8人	1年目の実施。授業実施後の新計画評価の目的で、履修者に聞き取り調査を実施。次年度に備え、国際文化専攻では、外国語学部6学科・専攻間で負担を分散させるために、担当者選定の輪番制を策定した。
2021年度	「国際文化研究基礎」	4人体制	亀井伸孝 ほか計7人	2年目の実施。研究科カリキュラム改訂に伴い、「国際文化論」から「国際文化研究基礎」へと科目名称を変更。授業実施後の新計画評価の目的で、履修者に聞き取り調査を実施。次年度担当者選定に当たり、大学院生指導経験もしくはそれに相当する力量をもつ人との条件を付けて募集を行った。
2022年度	「国際文化研究基礎」	4人体制	亀井伸孝 ほか計7人	3年目の実施。授業実施後の新計画評価の目的で、履修者に質問紙調査を実施。3年間を振り返って総括する目的で、授業担当経験者らで本論を執筆。次年度からコーディネータが交代することが決定した。
2023年度	「国際文化研究基礎」	4人体制	福沢将樹 ほか計7人	コーディネータが交代。4年目の実施予定。

1-2. 科目の概要と特徴

同科目は、研究者のスタートラインに立つ院生が備えておくことが望ましいスキルを習得することを目的として、各クラス4人の教員が、オムニバス形式で四つのパートを講義する形としている（表2）。

表2 「国際文化研究基礎」シラバス（2022年度前期）

講義題目	リサーチリテラシーの涵養
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究の世界に入るスタートラインにおいて、自立した研究者としての姿勢を培い、研究倫理を習得する ・ 他者の研究成果を適切に評価、理解し、学術の一端を担うスキルと姿勢を培う ・ 一般公開を想定した口頭発表や論文執筆のスキルを養う
授業概要	<p>本科目は、大学院国際文化研究科の博士前期課程に入学した大学院生が、日本文化専攻／国際文化専攻の別を問わず、また、各自の専門分野に関わりなく、全員が履修する半期の必修科目である。</p> <p>大学院に入学することで、学びのスタイルは、学部における学習とは大きく異なってくる。すなわち、自立した研究者としての素養や姿勢が期待される立場をもつことになる。大学院生は、自ら研究を立案して調査を遂行するのみならず、学術の世界に向けて成果を報告し、また、広く社会に対してその成果を発信、共有していくことも期待される。</p>
おもな内容	<p>パート1「研究者の倫理を学ぶ」</p> <p>研究者が踏まえておきたい基本的な倫理について、多様な事例に触れながら学ぶ。</p> <p>パート2「研究評価・指導方法を学ぶ」</p> <p>論文査読や模擬授業などの経験を通じ、相互に研究を評価し、指導する方法を学ぶ。</p> <p>パート3「論文執筆技法を学ぶ」</p> <p>書評執筆などの課題を中心に、公開されることを想定した適切な論文執筆の技法を学ぶ。</p> <p>パート4「学会発表の方法を学ぶ」</p> <p>口頭発表やポスター発表などの多様な形態を念頭に置き、学会などでの効果的なプレゼンテーションの技法を学ぶ。</p>

昼と夜の二つのクラスを並行開講し、両クラス共通の全体コーディネータを1人置く。コーディネータは、両クラスの一つのパートの講義も引き受ける。それ以外の両クラスの三つのパートについては、6人の担当者を選定し、各人が一つずつ担当する。特定の個人や部局に負担が集中しないよう、学科・専攻間での輪番制を取り入れるなどして、毎年度オムニバス授業担当者の人選が行われている（表3）。

表3 「国際文化研究基礎」各年度の担当教員（授業実施経験に基づき亀井作成）

年度		2020	2021	2022	2023（予定）
コーディネータ（昼・夜）		○亀井伸孝	○亀井伸孝	○亀井伸孝	□福沢将樹
				○鈴木隆（昼）※	
				○奥野良知（夜）※	
昼クラス	研究倫理	○糸魚川美樹★	□中西啓太	○菊池好行	○菊池好行
	評価指導	□福沢将樹	□宮崎真素美	○鈴木隆★	□福沢将樹
	論文執筆	○亀井伸孝★	○亀井伸孝★	○亀井伸孝★	○白谷望
	学会発表	○奥田泰広	○奥田泰広	□本橋裕美★	□洲脇武志
夜クラス	研究倫理	○山本順子・○今野元	○杉原周治	○宮谷敦美	○亀井伸孝
	評価指導	○月田尚美	○鈴木隆★	○奥野良知	□福沢将樹
	論文執筆	○亀井伸孝★	○亀井伸孝★	○亀井伸孝★	○池田利昭
	学会発表	□服部亜由未★	○伊藤滋夫	□井戸聡	□内記理

○は国際文化専攻、□は日本文化専攻の教員を示す。

※2022年4-5月の間、それぞれのクラスでコーディネータを代行。

★は本論で教育実践事例が紹介されているものを示す。

1-3. 3か年の実施状況

これまでの受講者数は、昼クラスの平均が9人、夜クラスの平均が5.3人と、おおむね10人以下に留まることが多い少人数授業である（表4）。

開講形態については、2020年度は感染症の影響のもと、全学の方針に従い、両クラスともオンライン形式となった。2021年度以降は、有職の社会人院生に配慮する研究科の方針に従い、夜クラスはオンライン形式を継続、昼クラスは対面形式を再開させた。

表4 「国際文化研究基礎」各年度の受講者数（単位：人）

（授業実施経験に基づき亀井作成）

年度		2020	2021	2022	3か年計	3か年平均
昼クラス	国際文化専攻	2	5	13	20	6.7
	日本文化専攻	2	3	2	7	2.3
	両専攻計	4	8	15	27	9
夜クラス	国際文化専攻	3	5	5	13	4.3
	日本文化専攻	2	1	0	3	1
	両専攻計	5	6	5	16	5.3
昼夜計	国際文化専攻	5	10	18	33	11
	日本文化専攻	4	4	2	10	3.3
	両専攻計	9	14	20	43	14.3

2章 各パートの授業実践事例紹介

本章では、5人の授業担当者が、それぞれのパートの担当経験に基づいて、授業実践の状況を詳述する。「学会発表の方法を学ぶ」は、実施状況が大きく異なることから、オンライン発表形式と対面発表形式の二通りの事例を掲載している。

授業内容や教材は、各授業担当者の裁量により定めることとしている。以下はあくまでも事例の紹介であり、今後の同科目の授業内容等を束縛するものではない。

2-1. パート1 「研究者の倫理を学ぶ」(糸魚川美樹)

2-1-1. 「研究者の倫理を学ぶ」の位置付け

本節は、2020年度愛知県立大学大学院国際文化研究科博士前期課程授業科目「国際文化論」(2020年度カリキュラム。2021年度から科目名が「国際文化研究基礎」に変更)における「研究者の倫理を学ぶ」全3回の授業(以下では、「研究倫理」と呼ぶ)の実施報告である。

2020年度本科目の「研究者の倫理を学ぶ」担当者として、外国語学部スペイン語圏専攻から、筆者(糸魚川)が出講した。筆者は研究倫理という分野にとくに詳しいわけではないが、2019年度本学学長特別教員研究費による共同研究において研究代表者として研究倫理審査に申請した経験があり、その経験からスペイン語圏専攻会議で推薦された。

筆者が大学院生の頃は、研究倫理という概念について授業で学んだ記憶はなく、研究において注意すべきことなどは、学部・大学院を通して、所属機関の執筆要項を読み、指導教員から教わる程度であった。近年では、研究倫理という概念とその具体的な内容は、研究者が守らなければならない規則のようなものとして理解され、本学においても毎年研修が設定されている。また、大学や研究機関によっては、研究倫理審査への申請条件として所属機関等の研究倫理研修の受講が条件となっているところもある。このような状況から、修士課程1年次の必修科目のシラバスに研究者の倫理に関する学びが組み込まれていることには重要な意味があるといえるだろう。

以下では、「研究倫理」全3回の目的、実施内容を報告する。

2-1-2. 担当授業の目的

博士前期課程（修士課程）以降は、学生であっても研究者として扱われる。この点が、院生と学部生の大きく異なる点である。人文・社会科学分野で研究を進めるにあたり、「研究者が身につけておかなければならない規範、研究者が従わなければならない規則、研究者に要請される基準」（眞嶋ほか編著 2015：4）（＝研究倫理）についての理解を深めることを3回の授業の目的とする。

2-1-3. 授業形態と実施内容

2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大によりオンラインでの実施となった。配布資料は本学が利用している情報提供システム UNIPA の掲示登録機能を利用した。

2020年度に担当した3回の授業内容を表5にまとめ、説明を加える。

研究倫理第1回オンデマンド授業として利用した、日本学術振興会『研究倫理 e-ラーニングコース [eL CoRE] 全6章』『大学院生向け 事例で「学ぶ／考える」研究倫理－誠実な科学者の心得』については、同年5月7日に本学研究支援課より本学院生全員に UNIPA で受講案内されていた。しかし、案内を理解しておらず、本科目の履修者は授業で指示するまで e-ラーニングコースが使用できることを知らなかった。日本学術振興会が配信している研究倫理 e-ラーニングコースは、研究倫理を網羅的に学ぶことができる。本学学生が利用できるリソースで、1度受講しても必要に応じて何度もアクセスできることから、修士課程1年目の早い時期に受講し、疑問点を解決しておくことが望ましいと考え活用した。

第2回の授業では、e-ラーニングコースの内容に関する疑問点等を出し合い意見交換をした。今後の研究倫理に関する授業を検討する上で、参考になると思われるコメントをまとめておく。

表5 「研究者の倫理を学ぶ」3回の授業内容（授業実践経験に基づき糸魚川作成）

2020年度「研究倫理」全3回実施形態・内容等		
第1回	2020年5月19日	e-ラーニングコース受講
	日本学術振興会『研究倫理 e-ラーニングコース [eL CoRE] 全6章』「大学院生向け 事例で「学ぶ／考える」研究倫理－誠実な科学者の心得」の受講 課題：e-ラーニングコース受講し、次の項目についてA4 1～2ページ程度にまとめ、第2回授業の前日正午までに、授業担当者にメールで提出する。 (1) 自分の研究テーマと研究方法（現時点） (2) 研究倫理について、認識が不十分だった点、新たにわかった点 (3) 研究倫理について、自分の研究テーマ、研究方法との関連で重要だと思う点 (4) 「研究倫理 e-ラーニングコース」の内容についての疑問 (5) 研究倫理について、受講者と議論したいテーマ	
第2回	2020年5月26日	Teamsによるライブ授業
	提出された研究倫理第1回の課題に基づき、授業担当者がスライドを作成、履修者と共有し、履修者が自由に発言、討論 第3回に向けた課題：次の論文を読み、1. わかったこと、2. 疑問、3. 授業で討論したいこと、4. その他コメント、の項目でまとめ、第3回授業前日正午（6月1日）までに Teams のチャンネル「研究倫理ライブ授業」の「ファイル」に提出 ・杉浦郁子（2014）『『ピア』に対するローカルな研究倫理という課題：日本クィア学会会員有志による活動を通じて考えたこと』『社会学研究』93（2014-01）（東北社会学研究会）：79-92.	
第3回	2020年6月2日	Teamsによるライブ授業
	「研究倫理審査」についての解説と、提出された研究倫理第1回の課題に基づき、授業担当者がスライドを作成し、履修者と共有しながら討論	

- (1) 学部の卒業課題作成時に先行研究等の引用について気にしなくてよかった。剽窃など論文を作成する上で基本的なことを知ることができた。
- (2) 日本学術振興会が配信している研究倫理 e-ラーニングコースは、理系に比重が置かれているので、文系に特化した研究倫理のコースを希望したい。
- (3) ある実験の被験者になった経験があり、e-ラーニングコースを通して、実験参加へのインフォームドコンセントの重要性について再確認した。

(1)について、日本の大学で卒業論文を執筆していない履修者の中には、卒業した大学において卒業論文またはそれに類似した課題を提出していたとしても、先行研究の引用方法や「盗用」という考え方が、まったく指導されていない場合があることがわかった。

第3回の授業では、人文・社会科学分野における研究倫理と人を対象とする

研究計画の審査（研究倫理審査）に関する論考をとりあげた。本研究科の修士論文研究においても、アンケートやインタビュー調査を実施する院生もいるため、研究倫理審査について知っておく必要がある。また、研究者が守るべき規範としての研究倫理を受動的に捉えるだけでなく、研究倫理をめぐる議論について知ることも意義があると考えた。そこで、東北社会学研究会『社会学研究』93号（2014年）の特集「社会科学と研究倫理」のうち、3件の文献を共有し、そのうちの1件、杉浦郁子（2014）（表5を参照）を授業で扱うことにした。本研究科の修士論文研究においては、不特定多数を対象とした大規模調査よりも、質的調査が選ばれやすく、中でも「ぴあ調査」（＝「同じような立場の者＝ピア」による調査、「調査者と協力者が共に当事者である」という関係性において行われる調査）（杉浦 2014：79）を実施する学生がいる、また「調査される側の不利益」について知る必要がある、と考えたからである。

なお、授業では扱わなかったが、共有した論文は次の2件である。ともに『社会学研究』93号、東北社会学研究会（2014年1月）掲載。

- ・田代志門「社会調査の『利益』とは何か：山口一男の問題提起をめぐって」同号 pp. 5-28.
- ・武藤香織「社会学と IRB 制度：米国での経験から何を学ぶべきか？」同号 pp. 29-49.

2-1-4. 授業を担当して

本授業で利用した日本学術振興会 e-ラーニングコースは、2022年度現在、本学大学院1年次の10月中旬までに受講することが推奨されている。全院生が e-ラーニングコースの受講することを考えると、コースを授業で利用する、または授業後のコース受講に備えシラバスを組み立てる、などより有効なコースの活用方法を今後検討してもよいだろう。

e-ラーニングコースは理系向けの内容に偏っているという意見が授業であった。個々の研究が将来的にさまざまな分野の研究者との共同研究に発展していく可能性もあることから、文系・理系問わず広く学ぶことにも意義があると、筆者自身の経験を履修者と共有した。

2-2. パート2 「研究評価・指導方法を学ぶ」(鈴木隆)

愛知県立大学大学院国際文化研究科、博士前期課程の授業科目「国際文化研究基礎」について、本学外国語学部中国学科からは、2021年度(水曜日・5限、夜クラス、オンライン形式)と2022年度(火曜日・2限、昼クラス、対面形式)の2か年にわたり、筆者(鈴木)が出講した。講義の分担パート(以下、本授業と記す)は、両年度ともに「研究評価・指導方法を学ぶ」であった。以下は、この2年間の授業実践に関する記録報告と若干の考察、提言である。

2-2-1. 担当授業の目的

本授業を担当するに際し、筆者がまず検討したのは、「修士1年生が学ぶに相応しい研究の評価と研究指導の方法とは何か」ということであった。この問いに対し、筆者は次のように考えた。すなわち、大方の受講生は、新年度の4月に本学に入学したばかりの、いわば研究者人生の入り口に立ったばかりの者であり、これらの学生にとっては他者の研究を評価したり、研究活動を指導したりする訓練もむろん大切だが、しかしそれ以上に、それらの要点を踏まえつつ、個々の研究活動、特に修士論文の執筆または課程修了制作物の作成(以下、「論文作成」と略記)にとって、より直接的に裨益するような授業内容の方が望ましいのではないかと。

そこで本授業では、「論文作成」のための初歩的な、だが重要な知的作業として、①各履修者による自身の研究テーマに関する先行業績の吟味、②これに基づく「問題の所在」(=リサーチ・クエスチョン)の検討を、第一義的な趣旨とした。

2-2-2. 担当授業の内容と進行

2021年度と2022年度のいずれも、授業内容は基本的に同じである。受講生には、後掲の「a. 事前に提示した2つの授業課題、履修者の報告内容」をあらかじめ告知し、実際の授業(計4回)では、①筆者の講義(1.5回)、②課題に基づく履修者の個人報告と他の参加者を交えた質疑応答(2.5回)を行った。報告と質疑応答の時間は、各年の履修者数に応じて調整し、当該授業の終了後

には、各回の議論を踏まえた筆者からのコメントをまとめ、受講生全員に配布した。

a. 事前に提示した2つの授業課題、履修者の報告内容

- ①自身の「論文作成」のモデルとなる他者の論文の概要と、その批判的考察の紹介
- ②学部時代に執筆した卒業論文、または、修士論文のテーマ案に関する先行研究のまとめ、及び、それを踏まえた自分のオリジナリティのある「問題の所在」の発表（＝問題発見と研究の着想、すなわち、今後の「論文作成」のエッセンスとなるものの初歩的検討）

b. 授業進行例（2022年度）（表6）

表6 授業進行例（2022年度）（授業実践経験に基づき鈴木作成）

日付	実施内容
5月24日	・鈴木作成の配布資料に基づく「論文執筆」の方法論に関する講義
5月31日	・前回講義の続き ・履修者による報告・質疑応答、討論（報告者、計3名）
6月7日	・履修者による報告・質疑応答、討論（報告者、計6名）
6月14日	・同上（報告者、計6名）、授業総括

2-2-3. 作成・配布の教材

a. 「論文作成」の講義資料

担当授業ではまず、初めの1.5回分を使って、筆者が作成した講義資料に基づき、「論文作成」のための方法論的解説を行った。この資料は、『『良い』論文とはなにか？『良い』論文を書くために何を心がけるべきか？：経験に基づく試論的整理』と題するもので、本授業のテーマ（研究評価・指導方法を学ぶ）を念頭に置きながら、学部・修士学生を対象として、筆者自身の研究活動の経験と反省に基づく助言的内容をまとめたものである。分量が多い（約13,000字、A4サイズで14枚）ため、目次と概要のみを以下に記す。

【目次】

- i. はじめに
- ii. 論文で追究されるべき問題——研究課題、研究テーマ
- iii. 「適切なサイズ」の問いへの絞り込み——個別論文の題目、「問題の所在」
- iv. 論文化のための基本的態度——構成、資料、仮説
- v. 「良い」論文として評価されるポイント
- vi. つまるところ、「なにをなすべきか」(レーニン)
- vii. (参考) 査読の実例——査読者はどのように論文を審査し、著者はいかに対応しているか？

「v. 『良い』論文として評価されるポイント」では、筆者自身の査読者としての経験に基づき、論文評価の重点項目(例：課題の重要性と独自性、関連・類似研究との比較、引証資料と方法の妥当性、注や章節の規程遵守、文章表現の明晰性)を説明した。逆に、「vii. (参考) 査読の実例」では、筆者の投稿論文に対する複数の査読者からのコメントや批判、それへの筆者の対応の仕方を紹介した。

また、「vi. つまるところ『なにをなすべきか』」では、筆者の個人的意見である点を前提としつつも、異なる学問分野、分析手法、発表の言語・媒体を超えて、学問業績として守るべき基本的なルールと、一定の型を遵守することの重要性を解説した。

b. 履修者の報告と受講生全員の質疑応答に対するコメント

第2～4回目の授業では、各履修者の「問題の所在」の報告と、それへの受講生全員による質疑応答を行った。そこでの報告と議論に対し、筆者からのフィードバックとして、上記3回の授業後、コメント(計3回、A4サイズで1～2枚、1,200～2,400字の分量)を毎回作成し、オンラインで配布した。コメント作成にあたっては、「論文作成」の方法論的講義で十分に扱うことのできなかった論点について、その補足を意図した。

2-2-4. 担当授業の特徴と受講生の感想、いくつかの提言

本授業では、「研究評価・指導方法を学ぶ」というテーマとの接合性を意識しつつも、受講生の「論文作成」に対する実践的意義を特に重視した。例えば、筆者自身の研究活動の経験に基づき、先に言及した講義資料を作成したり、筆者が2021年に発表した論文執筆時の構成案について、その下書きや修正状況を示した手書きの紙を、受講生に回覧したりした（アウトラインの紙は、本授業の参考資料として使用することを想定して、廃棄せずに保管しておいた）。論文執筆の技法を扱った一般的な手引書とは一味異なる、少人数の対面授業ならではのメリット発揮を強く意識したためである。

また、科目全体のスケジュールについても、当初案では、①「研究者の倫理を学ぶ」→②「学会発表の方法を学ぶ」→③「論文執筆技法を学ぶ」→④「研究評価・指導方法を学ぶ」であったが、「論文作成」の一般的な手順にしたがい、①→④→③→②に変更することを提案し、コーディネータをはじめ、他の講師の同意を得られた。関係各位に感謝したい。

以上の工夫について、受講生の反応は、おおむね良好であった。授業アンケートのいくつかの回答からは、筆者の授業意図を比較的良好に理解してくれたことが窺える。また、専門を異にする同学年の受講生との質疑応答も、新鮮にして刺激的な知的経験であったようである。以下は、2022年度受講生による、本授業への代表的な感想コメントである（文意を変えず、字句と文章表現を一部修正）。

【受講生の感想】

- i. 論文執筆のノウハウを丁寧に説明してくれた。今後の研究活動と論文作成に大いに役に立ちそうだと感じた。
- ii. 内容と構成の両面から、先行研究を批判的に検討するための手がかりを知ることができた。
- iii. 質疑応答授業後に配布される教員からのコメント資料から学ぶことが多く、今後の研究活動に活かしていきたい。
- iv. 大学院の授業や受講生仲間にくらか慣れてきた時期に、他の履修者の研

究計画を聞くことができ、自分の研究の励みになった。

- v. 他の履修者の研究構想を参考にしながら、その意義や批判的考察について聞くことができ、異なる観点を踏まえて学習することができた。
- vi. 「評価」について、研究分野ごとに解説を検討する機会があれば良かった。

このうち、vi. の指摘は、筆者（社会科学、政治学）と受講生の多数派（人文科学）との専門分野の違いを反映した言葉と思われる。筆者としては、こうした事情も考慮して、本授業の趣旨や資料の記載内容を最大公約数的に構想したつもりだが、異なる専門分野のより深いレベルへの期待に応えることは、単独講師の授業としては実際には難しい。それは、各履修者の研究指導に主たる責任を負う教員の仕事と考える。あるいは、2023年度以降の提言として、「評価」の部分について、人文科学と社会科学の2名体制で担当することも検討してもよからう。

また、これも1つの助言として、既述のとおり、科目全体のスケジュールについて、実際の「論文作成」の段取りに基づき、①→④→③→②に変更することも有益であろう。

最後に、筆者自身の感想として、自らの研究活動を改めて見つめ直すとともに、大学院生への研究指導の方法と意義を自覚的に整理し、洗練させる機会を得たという点で、自分にとっての学びが大であった。

2-3. パート3「論文執筆技法を学ぶ」（亀井伸孝）

2-3-1. 「論文執筆」パートの三つのねらい

本節では、「論文執筆の技法を学ぶ」パートの授業実践例を紹介する。修士論文執筆の指導は、2年間にわたってそれぞれの指導教員が担当するため、その「最初の一步」の手ほどきをするのがこのパートの役割である。専攻、分野、対象が異なる院生たちが共存するクラスで、全員にとってメリットがある授業内容であることも求められる。このパートでは、以下の三つの点に重点を置いて取り組んだ。

第一に、「論文に適した形式と日本語を再確認する」ことである。学部時代

に卒業論文を執筆した院生も、それが課されていなかった院生もいる。日本語を母語としない留学生や、過去に卒業論文を書いたものの、ブランクを経て大学院に入ったため、記憶が薄らいでいる社会人院生もいる。これら経験の多様性を念頭に、基本的な論文の形式と日本語の使用について、添削を通じて確認し、改善を図る。

第二に、「公開を前提とした論文執筆の姿勢を培う」ことである。学部生の卒業論文やレポートは、提出後に教員が評価して、未公開のままその役割を終えることも多いであろう。一方、大学院生ともなれば、論文を学会誌や紀要に投稿し、公刊する機会もある。不特定多数に読まれることを想定して、いつだれが読んでも明快で内容が伝わるよう、文体や盛り込む情報に注意を払う姿勢を培う。

第三に、「事実と解釈を明瞭に分離する習慣を身に付ける」ことである。論文には、客観的に得られたデータで立証する「事実」の部分と、若干主観的な観点が混ざった予測や理解、推測を含む「解釈」の部分の両方が含まれる。これらが混在していると読みにくい論文となるため、明瞭に分離して執筆する習慣を身に付ける。

2-3-2. 授業の進め方

実際の授業の進め方は、以下の通りである。書籍を1冊読み、3,000字程度の書評論文を1本執筆する。それに添削を行い、教員からのフィードバックをするとともに、履修生どうしでお互いに読み、コメントし合う。このサイクルを、対象書籍を変えて2回行うというものである。グループワークで相互の作品にコメントし合うことで、より多くの視点に基づくコメントを得ることができ、また、他者の論文の点検作業を経験する中で、自身も何らかの教訓を得ることができる。

書評対象書籍については、1回目のサイクルでは共通の課題図書を指定する。同一の書籍に対し、全員がそれぞれの視点で書評論文を執筆する。2回目のサイクルでは、各自が自由に対象書籍を選定する。多くは自分の専門分野に近い書籍が選定されるため、今度は「未読の読者に向けて書く」という執筆姿

勢を奨励する。

グループワークは、3人1組を基本形とし、机を向かい合わせて行う（オンライン形式の授業の場合は、Zoomのブレイクアウトルーム機能を用いる）。授業時間内に他者の書評論文を精読し、コメントを記入する。その後、それぞれの書評論文について、形式、日本語、内容など、各方面からの自由な議論を行うことを奨励する。これらを終えた上で、最後に教員から各自へのコメント入り提出物を返却し、多くに共通して見られた改善点や注意点などについて全体に説明する。

2-3-3. 書評論文の構成

書評論文の形式は、厳格に指定する。論文全体をいくつかのパートに分け、それぞれの役割を明瞭に意識して執筆することとした。まず、論文の前半は「客観」に徹して書き、後半は「主観」を交えて自由に執筆するという基本構成を提示する。また、前半の「客観」部分を【紹介】と【要約】に、後半の「主観」部分を【論点】と【雑感】に分離し、それぞれに適切な内容を盛り込んでいくこととする（表7）。分量としては、二つ目の客観的な【要約】部分と、三つ目の自分の意見を表明する【論点】部分に多くの字数を費やすよう指導した。

表7 書評を構成する四つの要素（授業実践経験に基づき亀井作成）

構成部分の名称		盛り込むべきおもな内容
客観	【紹介】	本書および著者の紹介をする
	【要約】	本書のもくじに従って、各章や節ごとに内容をまとめていく
主観	【論点】	本書の意義（注目すべき特色、魅力、おもしろさ、主張、功績など）を挙げながら、それらに対する自由な論評を行う
	【雑感】	論点の部分で述べなかった、本書に対する感想、印象、注文、今後への期待など、それ以外の雑多なことをまとめる

2-3-4. 教育実践の成果

初回の授業導入時に、「過去に自分が読んだことのある任意の学術書を対象とし、500字程度で自由に書評を執筆せよ」という軽めの課題を出して、現状把握をすることがある。その提出物を見ると、形式はまちまちで、日本語も

エッセイ風の柔らかすぎる語句や勢いのありすぎる文体などが散見される。特定分野に通じた人でなければ読解しづらいものや、客観部分と主観部分が混在しているものもある。

このパートの授業を開始し、本節冒頭の「三つのねらい」を念頭に注意を促した上で、1回目のサイクルをこなすと、基本事項についてはかなりの改善が見られる。そして2回目のサイクルを終える頃には、添削で注意を促す箇所はかなり減り、そのまま刊行できる水準に達する作品も見られる。2回の作業を通じ、論文に適した形式と日本語の力、公開を前提とした姿勢、事実と解釈を明瞭に分離する習慣がある程度身に付くことが明らかとなった。

履修生の授業評価でも、論文執筆の基本技法が身に付いた、短時間で2本の書評論文を執筆し、細かいコメントをもらえる濃密な学習機会となった、相互に読み合うグループワークが効果的だった、などと歓迎する評価が多かった。

2-3-5. 副産物としての研究者の心得習得および雑誌掲載

この書評論文の執筆作業を、研究者としての心得を習得することにも関連させて説明している。事実と解釈を分離して提示することは科学の基本姿勢であり、口頭発表などにも応用できる構造であること、文献を読むだけでなく論評して発信することは、学術情報の交換や議論の蓄積に寄与する重要な営みであること、他者の研究を賞賛するだけでなく不足点を指摘することは、失礼なことではなく、次の研究課題を展望する重要な協働作業であることなどを伝える。「読み、書くという作業を、私的な領域から公的な領域へと解き放つ」契機とするのである。

さらに、これらの成果を有効に活かす方法として、優秀作品を選定し、実際に雑誌に掲載する取り組みを行ってきた。本学多文化共生研究所の雑誌『共生の文化研究』に書評コーナーを設置し、優秀と認められた作品の執筆者に投稿機会を提供するというものである。同誌第13号（2018年度）から開始、第16号（2021年度）までの4号に、合計23本の書評論文が掲載されたが、そのうちの18本は同年度の履修生による作品である（愛知県立大学多文化共生研究所 2019-2022）。自作が実際に刊行される可能性を示すと、それを目標に優れ

た作品を書こうという動機付けをもたらすこともでき、優れた教育効果がある。院生教育が、そのまま研究成果の公開と実績につながっていくというこのような連携の取り組みは、今後いっそう工夫ができる部分であることだろう。

課題としては、履修者は短期間で学術書読了と書評論文執筆を行わねばならないこと、教員は短期間で添削すべきことといった作業の忙しさがある。授業時間数の調整や日程の配置の工夫などによって、多少緩和されることが期待できる。

2-4. パート4「学会発表の方法を学ぶ（オンライン発表形式）」（服部亜由未）

筆者（服部）は、2020年度の水曜日・6限「国際文化論（現、国際文化研究基礎）」のうち、「学会発表の方法を学ぶ」を担当した。2020年度は、「研究者の倫理を学ぶ」、「学会発表の方法を学ぶ」、「論文執筆技法を学ぶ」、「研究評価・指導方法を学ぶ」の順に進めた。翌年からは、担当教員からの提案により、「学会発表の方法を学ぶ」は最後のパートに変更した。また、2020年度は、新型コロナウイルス感染症の流行が本格化し、大学全体で授業開始時期を1ヶ月遅らせ、各教員がオンライン授業の方法を模索しながら、授業を進めた時期であった。

本節では、「学会発表の方法を学ぶ」のうち、オンラインで授業を行い、実際にオンラインで学会発表をした授業の分担パート（以下、本授業と記す）について、全3回の実施内容を報告する。

2-4-1. 本授業の目的

研究の世界に入ったばかりの前期課程1年生は、学会発表を経験したことがない院生も多く、学会自体に行ったことがない院生もいる。また、本研究科の院生の中には、後期課程に進学する予定はなく、前期課程修了後には専門性を活かした職に就く予定の院生や、働きながら通う社会人院生もいる。このような院生においては、在学中に学会発表の機会はないかもしれないが、社会においても、よりわかりやすくプレゼンテーションする能力が問われよう。

そのため、本授業では、まず、学会発表の目的を学び、自らの研究成果を学

術世界や社会に向けて発信する際に、わかりやすくプレゼンテーションできるようになることを目指した。

2-4-2. 授業形態

当初は、3回の授業の中で、学会発表の目的、学会での口頭発表やポスター発表などでの効果的なプレゼンテーションの技法を学ぶことに加え、最終的には、他分野の院生や教員に対して、印刷したポスターを掲示してプレゼンテーションを行う「模擬学会発表（ポスターセッション）」を計画していた。この模擬学会発表（ポスターセッション）は、大学院合同ゼミ（正式科目名「国際文化特殊演習」）との共催も検討していた。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の流行により、どちらの授業もオンラインとなり、対面での模擬学会発表（ポスターセッション）の実施は難しくなった。また、6限の主な受講生は、働きながら学ぶ院生である。初回の授業時に、院生に話を聞いたところ、仕事が終わってから6限の授業開始までに通学することは、時間的に厳しいとの意見が数人から寄せられた。

以上の点から、本授業は、すべて Teams を用いたオンライン（ライブ形式）で行い、最後の模擬学会発表も、対面での模擬学会発表（ポスターセッション）を断念し、オンラインによる模擬学会発表へと変更した。なお、本授業が終わった頃（2020年7月15日）に、本研究科では、社会人院生を中心とする時間的制約の大きな学生への修学支援の観点から、通常の授業形態に戻った際にも、夜間（6・7限）の授業は原則として遠隔方式で実施することに決めた。

2-4-3. 授業内容

1回目の授業（2020年6月17日）では、まず、本授業の目的と概要を説明し、最後の模擬学会発表の実施方法について話し合った。その結果、オンラインによる模擬学会発表とし、大学院合同ゼミとの共催にはせず、本授業のみで実施することが決まった。

オンラインでは、学会のポスターセッションのように、1枚のポスターの前後内容を伝えて議論することは想定し難いと考え、事前にポスターをオンライ

ン上で共有し、ポスターの内容についてスライドを用いて口頭発表をすることにした。今では、長引くコロナ禍において、オンライン学会も様々な工夫がなされ、オンラインでのポスター発表の方法も進展している。しかし、本授業を担当した当時、筆者は良い方法を思いつかなかった。そのため、オンラインによる模擬学会発表への変更にともない、スライドを用いた口頭発表に重きを置き、ポスターは補助的な資料として扱うことにした。

次に、酒井（2018）を参考に、筆者のこれまでの経験をふまえて資料を作成し、学会発表の意義、ポスター、スライド作成について説明した。特に、わかりやすい発表をするために心がけること、そのためのプレゼンテーション技術について詳しく説明した。その一例として、酒井（2018）に掲載されているポスターとスライドの例や、「見やすいプレゼン資料の作り方」（森重 2014）を提示した。発表内容は、卒業論文、これまでの研究や実践してきたこと、自己紹介、今後の研究計画などから、15分以内で伝えられる内容とした。

2回目の授業（2020年6月24日）には、発表内容、ポスター、スライド作成についての相談に応じた。ポスター、スライドとも、PowerPoint で作成した。PowerPoint の操作に関する相談では、対面であれば、受講生の画面を操作しながら伝えることが容易である。しかし、オンラインの場合は、まず、受講生のスライド作成画面を共有しながら困りごとを聞き、その後、筆者の画面を共有して、解決手法を伝えるという方法を取らざるを得なかった。受講生は、発表内容が決まり次第、発表タイトルを Teams に書き込んだ。

3回目の授業（2020年7月1日）までに、作成したポスターを Teams のファイルに提出した。オンラインによる模擬学会発表では、筆者が座長となり、1人当たり15分の発表に対し、5分の質疑応答の時間を設けた。各発表について、受講生と筆者ともに、Forms のアンケート機能を用いて点数をつけた。今回の点数は、内容よりも「わかりやすい発表だったか」で評価するように統一した。

2-4-4. 本授業を担当して

本授業は、国際文化研究科の院生とは言え、様々な分野の院生が履修している。そのため、他分野の人にも理解してもらえる発表を目指すことによって、

よりわかりやすい発表とは何かを考えるには、とても良い場と言える。さらに、1年生前期の授業であったため、他の院生の研究内容について知ることができる機会となったであろう。質疑応答時間における質問の仕方や質問への対応の仕方について、1回目の授業で伝えていたためか、オンラインかつ5分という短い時間ではあったが、活発な質疑応答ができたと考える。

初めてポスターを作成した院生も多く、スライド自体も通常はほとんど作成しない分野の院生がほとんどであった。ただ、ポスターやスライドの例の提示や、PowerPointの細かな操作方法などの相談時間もあり、作成については無理なくできたこと、学部卒の院生は話していた。また、Teamsに提出されたポスターを見ておくことで、発表の全体像を理解しやすかったとの感想もあった。一方で、卒業論文執筆から時間が経った社会人の院生にとっては、発表内容を決めることに時間がとられてしまったとの意見も寄せられた。こうした社会人の院生にとっても、発表しやすい内容例を多く提示すべきであった。しかしながら、どの院生も真剣に取り組み、担当者としても有意義な授業であった。

2-5. パート4「学会発表の方法を学ぶ（対面発表形式）」（本橋裕美）

2-5-1. 本授業の概要

本報告は、2022年度前期に開講された「国際文化研究基礎」のうち、第12回、13回、14回、15回の授業に関するものである。本学国際文化研究科博士前期課程の学生15名が履修し、本授業においても若干の欠席はあったが、出席状況としては良好であった。授業全体の方針等については総論に詳しい。

「学会発表の方法を学ぶ」の4回は対面形式で実施され、授業内容については授業担当者に任されている。前年度の同授業で行われたポスター発表会が好評であったため、本年度もそれを踏襲し、ポスターの作成、発表を中心とした授業を設定した。筆者（本橋）の専門は日本古典文学であるが、特に国内の学会発表の形態としてポスター発表が用いられることは多くない。国際学会での経験などをもとに、学生とともに教授者自身もポスター発表について学びながら指導を行った。

2-5-2. 本授業の目的

本授業は、基本的に博士前期課程に入学した年度の学生の履修を想定しているため、研究者としての入り口に立つ学生に、ポスター発表という実践をとおして今後の研究発信に向けた可能性を拡げることを目的とした。

具体的には、「学会」が研究発信の場としてあること、研究発信の方法が複数あることを知り、ポスター発表の実践を経て、発表の形態と自身の研究のあり方を分析することを目指す授業である。

2-5-3. 本授業の実施内容

本授業の実施内容は以下のとおりである。

表8 「学会発表の方法を学ぶ」実施内容（授業実践経験に基づき本橋作成）

	実施日	内容
第12回	7月5日	「学会」「発表」について知る
第13回	7月12日	ポスター発表について知る／ポスター作成
第14回	7月19日	ポスター印刷、発表会準備
第15回	7月26日	ポスター発表会

本授業の初回（全体としては第12回）では、「学会とは何か」「発表とは何か」という問いを立て、グループワークや意見交換をしながら検討した。すでに学会や研究会に参加したことのある学生も多く、また分野の広がりも大きかったため、学生同士の意見交換が有意義なものとなった。本担当授業は、授業全体のなかでも後半にあたり、すでに研究倫理や論文執筆について学んでいるため、研究者として自身の研究成果をきちんと発信する義務があることを意識している学生が多かったことが印象的である。一方で、研究発表については、卒業論文発表会のような、ひとりが壇上に立ち、静かに発表を聞いてもらって質疑を行うような形式しかイメージできない学生が多かった。画像などを用いながら、必ずしもそのような発表形式でない学会発表があるのだと伝え、シンポジウムやパネルディスカッション、ラウンドテーブル、ポスター発表などさまざまな形態の学会発表について紹介した。「学会発表を学ぶ」の4回目においてポスター発表を行うことを学生に示したうえで、壇上で一人が話

す形式の口頭発表と、対話を重視するポスター発表との違い、メリット、デメリットについてグループワークを行い、分析した。

第2回(全体としては第13回)では、ポスター発表の意義を検討したうえで、ポスター作成の導入を行った。ポスター発表は、研究に興味を抱いた人と話せる、近い距離で対話ができるなどのメリットがある。学生たちには、ポスター作成にあたってどのような点に気をつければよいかを考えさせてから、まずは紙面でポスターイメージを作らせ、各自でポスター作成を行った。ポスター作成は、基本的に Microsoft PowerPoint で行った。ポスター発表のための材料については、各自で用意するよう伝えてあったため、すでにイメージを持っている学生については極めてスムーズにポスター作成に取りかかることができた。反面、題材を準備できていない学生は、ぼんやりと手を止める時間が多かった。ある程度、各自のイメージが固まったところで、3人程度のグループを作り、各自のポスターについて意見を交換する時間を設けた。活発に議論を行うグループもあれば、パソコンの操作や PowerPoint の機能を教え合うグループもあった。途中でグループのメンバーを変更し、さらに意見交換を行い、各自のポスターイメージを固めたところで授業としては終了し、次回までにポスターを仕上げてくることとした。なお、ポスター発表の内容については、各自の自由としている。卒業論文をもとにする者、修士論文に向けた内容にする者など、分野、内容は多岐に亘るが、本授業は実践することに重きを置いているため、内容については基本的に問わないこととした。

第3回(全体としては第14回)は、ポスターの印刷を行った。今回のポスターは A1 (594mm×841mm) で縦を基本としている。A1 ないし A0 のポスターサイズが印刷できる場所は限られており、本授業においては本学のポスター印刷用のプリンターを用いた。A1 を印刷する機会が少ないため、学生たち自身で経験してもらうことが狙いであったが、ソフトウェアのバージョンの違いによって枠がずれるなど技術的な問題が多く発生し、ほぼ印刷だけで授業が終わってしまったことが本授業の大きな反省点である。この点については後述する。学生たちは、それぞれ自身のポスターをプリントアウトして、ミスに気づいたり、見え方やポイントに反省したり、よく観察することができた。画面上

で作成するものとは違って見えるというのは、多くの学生が共通して感じていた点であり、当然のことではあるものの、実践の重要性が見える体験だった。

第4回（全体としては第15回）は、K棟の奥にある交流スペースでポスター発表会を行った。2限の授業のため、10:20ごろに集合し、発表準備を整えて、2チームに分かれ、それぞれ30分程度の時間をとって発表を行った。1チームが発表している間、もう1チームは聴衆になるという形式である。本授業の他の担当者や学生の指導教員の参加もあり、充実した発表会となった。聴衆は報告を聞いた発表者に評価カードを渡し、また発表を終えたあとに各自が自分自身の評価をカードに記入することで、本授業のまとめとした。

2-5-4. 本授業の課題

「学会発表の方法を学ぶ」というテーマで、分野によってはなかなか体験する機会の少ないポスター発表の実践を行ったことは、学生にとって良い経験であった。ポスターを作って発表するだけでなく、聴衆側として参加する時間もあったことで、ポスター発表の面白さや自身の発表の至らなさに気づく契機となった点も良かったと言える。

本授業の大きな課題は2点である。1点目は、第3回のポスター印刷の回が間延びしてしまったこと。2点目は、振り返りの時間が十分でなかったことである。

1点目については、学生からも「無駄が多い時間だった」「もう少し学ぶべきことがあるのではないかと感じた」という感想があり、改善していく必要がある。ポスターをプリントアウトするという経験は重要であるが、今回15人と履修者が多かったこともあり、学生たちに空白の時間を作ってしまった。改善策としては、チームを分けて、TAなど教授者以外がプリントアウトの指導を行い、それ以外のチームは別の課題に取り組むなどの方法が考えられる。また、PowerPointのバージョンが古くフォントが対応していない不具合が大きな問題としてあったので、パソコン等の機器の改善も有効であると思われる。

2点目については、第4回目に集大成としての発表を行ってしまったことが要因である。授業後の感想でも、「実践は有意義だったが、理論的なところを

もう少し掘り下げてほしかった」という意見があったが、実践を理論として整える場を設けられなかったことは、本授業の成果を見えにくくすることに繋がってしまったと考えている。ポスター発表を終えて、学生たちが自身の研究を発信する場としてポスターをどう考えるかなど、改めて議論する場が必要であった。

2-5-5. おわりに

本授業「学会発表の方法を学ぶ」は、体験することを重視して構想したが、体験を理論として落とし込んでいく作業については多くの課題を残すことになった。一方で、体験したことの重要さは学生たちが今後、研究者として発信を行っていくなかで改めて感じていくことである。本授業を履修した学生たちから定期的に振り返りを得て、その声を生かしていくことを意識していきたい。

おわりに

以上、四つのパートについて、5人の教育実践経験者の記録とそれに基づいた分析、評価の結果を紹介した。試行錯誤しつつ3か年開講してきた同科目は、研究者としてのスタートラインにおいて学ぶべき重要なことを授業内容としてそろえることができた。また、基本スキルを習得するのみならず、自立した研究者としての意識を醸成するための通過儀礼の意味をもあわせもっていると言える。さらに、日本文化専攻と国際文化専攻の両方の院生が、専門の違いを越えて共に学ぶことにより、院生間の密な関係と対話を促進する側面をもっている。これらの達成については、上記の授業実践記録の中でも見ていただけたことであろう。

各パートの内容に即した課題も散見されるが、このような各点については、同年度の担当者の間での密な意見交換を促進するほか、年度が変わって担当者が交代する際に記録を作成したり、引き継ぎの打ち合わせを重ねたりすることで、時間をかけて改善を図っていけることであろう。研究促進と人材育成の両側面を見据えつつ、引き続き検討を重ね、優れた教育実践へと育てていくことが期待される。

謝辞

「国際文化研究基礎」の各年度の授業を共に担当した教員各位、協力くださった学務課職員各位にお礼申し上げます。また、本論でも資料として参照した通り、授業改善の目的で授業評価を実施しました。この調査に協力してくれた各年度の受講生各位に対して、謝意を表します。さらに、書評論文刊行に際し、本学多文化共生研究所のご協力をいただきました。

文献

- 愛知県立大学多文化共生研究所. 2019-2022. 『共生の文化研究』 vol. 13-16.
- 酒井聡樹. 2018. 『これから学会発表する若者のために：ポスターと口頭のプレゼン技術（第2版）』東京：共立出版.
- 杉浦郁子. 2014. 「『ピア』に対するローカルな研究倫理という課題：日本クィア学会会員有志による活動を通じて考えたこと」『社会学研究』93（2014-01）（東北社会学研究会）：pp. 79-92.
- 眞嶋俊造・奥田太郎・河野哲也編著. 2015. 『人文・社会科学のための研究倫理ガイドブック』東京：慶應大学出版会.
- 森重湧太. 2014. 「見やすいプレゼン資料の作り方（リニューアル増量版）」<https://www.slideshare.net/yutamorishige50/ss-41321443>（最終閲覧日：2022年10月16日）.